

広い宇宙空間を進む一隻の宇宙船。

窓からは、深い暗闇に浮かぶいくつもの星が見える。

宇宙船が地球を出発して、もう一か月ほどになる。宇宙船には五名の乗組員の姿があった。五名の目はうつろで、頬はこけている。ここ数日は事務的な会話しかされていない。

事の起りは、宇宙研究所の新惑星発見であった。

早速、調査隊が組まれた。調査隊は宇宙研究所に所属する五名の宇宙飛行士。五名は、最新式の惑星探査船に乗り地球を発った。研究所の予測では、二週間前後で新惑星に到着するはずであった。

しかし、地球から距離があつたためか、計算通りにはいかなかった。二週間、三週間経っても、目的の新惑星にはたどり着けなかった。

無気力な調査隊員たちが各自の作業をしていたとき、操縦室にいた隊員が、興奮と驚きの入り混じった声で叫んだ。

「おい！ みんな！ 目的の星が見えたぞ！」

「どこだ、どこに見える？」

隊員が続々と操縦室に集まつてきた。狭い操縦室はあつというまにぎゅうぎゅう詰めになつてしまった。

「みんな。早く確認した気持ちはわかる。だがしかし、操縦室は狭い。新たなことが分かり次第、すぐに知らせるから、各自作業に戻ってくれ」

最年長であり隊長でもある男が、骨が振動するような低い声で言った。

「……わかりました」

隊員たちは、隊長に諭されて、渋々、それぞれの作業に戻つていった。操縦室には、隊長と操縦士である若い男の隊員が残った。

「よし、まずは星の様子を確かめいといけない。小型の無人調査機を飛ばして調べてみよう」

「わかりました。もしかしたら、狂暴な生物や、住民が存在しているかもしれませんがね」

操縦士が右手でハンドルを握つたまま、左手でハンドルの左上にある青く光っているボタンを押した。

少しの間をおいて、宇宙船が細かく振動した。宇宙船の真ん中あたりから、ハッチが開く。ハッチから小型の無人調査機が出てきた。無人調査機は、勢いよく目的の惑星へと飛んでいった。

操縦席の正面にある大きなフロントガラスの左側に、無人調査機のカメラから送られてきた映像が映し出される。

最初に映し出された映像は、一面に広がる深い青色の海であった。水面では、小さな波が揺れるたびにキラキラと光が反射している。

「これは、海、ですかね？」

「地球にある海と、ほとんど変わらないな。光を反射しているが、太陽のような星が近くにあるのか」

「調べてみます」

操縦士が左手でいくつものボタンをせわしなく押している。

フロントガラスに映し出される画像が消えて、立体的な惑星図が映し出される。中央にある青色の星が目的の惑星だ。惑星の周りをオレンジ色の球体が回っている。

「どうやら周りを回っている球体が太陽にあたる星です。星を構成している物質も太陽とほとんど変わりません」

「太陽の周りを回っている地球とは正反対だな」

惑星図が消えると、再び無人調査機から送られてくる映像が映し出される。今度は、見渡す限りの荒野が映っていた。動物はもちろん草木一本すら見当たらない。見えるものといったら、風によって舞い上がる砂ぼこりと、所々に見られる大小さまざまな岩山だけであつた。

「陸地もあるようですね。ただ、生き物は見当たりません」

「降りることができるのであれば、降りてみよう。空気中の成分はどうだ」

操縦士が画面の端をのぞき込む。そこには、アルファベットと数字で空気中の成分が表示されている。

「地球よりも、いくらか酸素が濃いようですが問題にならない程度です」

「よし、着陸するぞ」

隊長は操縦室を出ると、各隊員に着陸のことを知らせた。

「宇宙船が大きく揺れるから、全員自分の席に戻りベルトを着用しろ」

全員が自分の席に着き、ベルトを締める。

宇宙船は、大きく揺れ、地響きのような轟音をたてた。

操縦士がアナウンスをする。

「まもなく、目的の惑星大気圏に突入します！」

地響きのような轟音が続いていたが、しばらくすると、揺れが収まり静かになった。宇宙船は安定飛行に移った。

宇宙船の窓からは、無人調査機の映像にあつた海が見える。

「おー、海が見えるぞ！」

窓際の席に座っていたスキンヘッドの隊員が、喜びの声を上げた。

しばらく進むと、着陸予定地である荒野が見えてきた。

着陸予定地の近辺では無人調査機の姿があつた。

再び、操縦士がアナウンスをする。

「着陸予定地に着きました。これより着陸をします」

宇宙船が徐々に降下していく。砂煙をたてながらゆっくりと着陸をした。

船内では、完全に静止するのを待ってから、それぞれベルトをはずした。

「やっとな」

筋骨隆々の隊員がつぶやいた。

「ああ、長い道のりだったな」

長身痩躯の隊員がため息まじりに答えた。

隊長は、窓から外の様子を確認している。視線を右、左と動かし変わったものがないか探している。しかし、窓から見える範囲では、何も見当たらなかった。

「気を抜くのは、まだ早いぞ。外へ出て、地球に役立つ物質や情報を持って帰らなければならぬ。休憩をしたら、さっそく捜査へ向かう」

「はい！」

長身瘦躯の隊員が、気合を入れなおすように背筋を伸ばした。

操縦室から、操縦士が、腕を回して体をほぐしながら出てきた。

「とりあえずは、みんなでコーヒーでも飲んで一息つきませんか？」

「俺、持ってきますよ」

スキンヘッドの隊員が調理室へ向かっていった。

一時間ほど休憩をした後、隊員たちは調査のための準備を始めた。

「どうやって調査をしていきますか？」

長身瘦躯の隊員がカバン型の調査ツールセットを点検しながら聞いた。

「うむ。まずは、この近辺を調査する。一人が宇宙船の残り、残りの四人は二手に分かれて調査する。もし、何か変わったことがあれば必ず無線で知らせてくれ」

荒野では、風が吹くたびに砂ぼこりが舞っている。

宇宙船が振動すると、前方にあるハッチが開きタラップが出現した。操縦士以外の隊員がタラップを降りていく。隊長、スキンヘッドの隊員、長身瘦躯の隊員、筋骨隆々の隊員は、それぞれ白い宇宙服を身にまとっている。全身だばだば、頭の部分はヘルメットのようになっていて、透明な特殊プラスチック製ゴーグルが付いている。

隊長は、右手でヘルメットを抑えながらあたりを見回した。

「では、これから調査を開始する。二人一組での行動を原則とし、遅くとも六時間後には、この宇宙船に戻ってくる。幸い、磁力がありコンパスが使える。離れても場所は分かるはずだ。チームは先ほど決めたとおりで。何か質問はあるか？」

隊長は、三人の隊員に順番に視線を向ける。

「各自、くれぐれも気を付けるように」

隊長とスキンヘッドの隊員の組、長身瘦躯の隊員と筋骨隆々の隊員の組、それぞれ、歩き出し宇宙船を離れていく。

空は、濃い紺色に変化してきた。

隊長とスキンヘッドの隊員は、六時間歩き回り何の成果も得ることができなかった。

予定では、調査隊五人全員が宇宙船に集まっているはずだった。しかし、宇宙船にいるのは、隊長、スキンヘッドの隊員、操縦士の三人だけであった。

「遅いな。集合時間から二時間も経っている。やはり、何かあったのだろうか。連絡は入っていないよな、どうだ？」

操縦士が、壁に備え付けられている黒い無線の機械を確認する。この二時間で何十回と繰り返し返された動作だ。

「連絡は入っていないですね。本当にどうしたのでしょうか」

「何か危険な生物にでも出くわしたのだろうか。護身用に電子銃を持っているはずだが。いや、それでもかなわないようなものに遭遇したのだろうか」

隊長が腕を組んで、低い声で唸る。

無線が高い音を放ち着信を告げた。すぐさま、操縦士が受信機をつかむ。

「どうした、何かあったのか？」

「助けてくれ！ いきなり……が……襲われ……、俺たちも……くそっ！ や……見つかつた……ぐわっ……ギャー！」

ノイズが混じり聞こえづらかったが、筋骨隆々の隊員の声であった。通信は、叫び声を最後にブツンと途切れてしまった。無音と緊張が宇宙船の室内に満ちる。

「隊長、い、今のは」

「ああ、何者かに襲われたということか」

操縦士が、受話器を握ったまま震えている。

「ど、どうしますか。助けに行きますか？」

「本音を言えば、今すぐにも助けに行きたい。だが、あの様子では生きていくかどうか危うい。今、助けにいつても間に合わない可能性が高い。夜明けを待ち、二人を探しに行く」

「わかりました」

空がほんのりと白んできた。荒野では霧が濃くなっていた。

宇宙船から延びるタラップの上には、三人の人影が浮かぶ。だぼだぼの宇宙船に身を包んだ隊長とスキンヘッドの隊員だ。

隊長は、ヘルメットに備え付けられているマイクに話しかける。

「すまないが、また船番を頼む。二人が生きていれば連絡が入るかもしれん」

「くれぐれもお気を付けてください。何かあれば、すぐに知らせます」

ヘルメット内のスピーカーに操縦士からの応答が流れた。

隊長とスキンヘッドの隊員は、長身瘦躯の隊員と筋骨隆々の隊員が進んだ方向に歩いていく。

荒野を覆う霧は、どんどんと濃くなっていく。

隊長とスキンヘッドの隊員は、一步一步ゆっくりと進んでいく。しばらくすると、二人の先、濃い霧の向こうにぼんやりと影が揺らめいていた。

「隊長、あれは何でしょうか」

「霧で、はっきりと見えないな。電子銃をかましろ。いつでも撃てるようにしておけ」

二人は、電子銃をかまえて、影へと向かってゆっくり距離を縮める。先頭を歩いていた隊長の腰のあたりに、何かがぶつかり、にぶい音を立てた。

「痛っ。何だ、何かあるぞ」

隊長は、半歩下がって障害物の正体を確認する。それは、石のような素材でつくられた柵であった。人間の腰ぐらゐの高さで、霧の向こうまで続いている。

「こんなところに柵のようなものがある。なぜだ」

「そんなことより隊長！ 影が、もう目の前に！」

二人が銃を構えることも忘れてまごついてしていると、柵の向こう側に見える影が近づいてきた。

柵の向こう側にいた影の姿は、人間によく似た異星人の姿だった。人間と同じように胴体に手と足が二本ずつ生えている。さらに、人間と同じように二本の足で歩いている。頭には銀色の髪の毛のようなものが生えている。肌の色はベージュで、耳の先がとがっていた。顔には、二つの目、目の下に鼻、鼻の下に口と、人間と同じような造形をしていた。腰のあたりには、ボロボロの布切れのようなものが巻かれている。

霧が少し薄くなってくると、柵の向こうには四人の異星人の姿があった。どの異星人も同じような姿、格好をしている。手を振りながら、言葉を発し、何かを伝えようとしてい

る。

「ガガガ、ギギ、ゴゴゴ」

「隊長、この人たち、なんて言っているのでしょうか？」

「俺にだってわからん！ そうだ、この宇宙服には翻訳機が付いている。ヘルメットのスイッチをオンにするだけで使えるはずだ」

隊長は、ヘルメットを手で探り、翻訳機のスイッチをオンにする。

「ガガ、ゴゴゴ——あなたたちは、私たちと似ているが、この星の住民ではないですね。いったい、どのような星から来たのですか？」

異星人に戦意がないことを知った隊長は、いくぶんか落ち着きを取り戻してきた。

「私たちは、地球という遠く離れた星からやってきました。ひとつお聞きしたのですが、我々と同じ姿をした仲間を見なかったのでしょうか」

翻訳機は双方の言葉を訳してくれるので、隊長の言葉は異星人にも伝わった。

「あなたたちと同じような姿の人を見ました」

「本当ですか！ 今、どこにいるか分かりますか？」

「いや、もういないです。食べられました」

行方不明だった隊員の末路を聞いて、隊長とスキンヘッドの隊員は顔を見合わせた。二人は落胆の表情を浮かべ、うつむいた。

「隊長、何か遺留品があるかもしれません。現場へ行ってみませんか」

「確かに。そうだな」

二人は、異星人の方へ向き直った。

「すみませんが、食べられた場所へ案内してくれませんか」

「ええ、かまわないですよ」

異星人たちは、隊長とスキンヘッドの隊員に背を向け歩き出した。二人は策を乗り越えて、後を付いていった。

荒野を覆っていた霧は、ほとんど晴れてきていた。目を凝らすと、遠くの方に緑色に包まれた山々が見える。

「隊長、向こうの山を見てください。この星にも草木があつたようですね」

「ああ、そうだな。荒野ばかりだと思っていたが、違うようだ」

一行の行く先に、石のような素材で作られた小さな東屋が見えてきた。

異星人は東屋の前で立ち止まった。

「ここです。あなたたちに似た生き物が食べられました」

隊長が床に視線を落とすと、血痕が残っていた。しゃがんで、指でなぞる。まだ、完全には固まっておらず、指に血痕が付着した。

スキンヘッドの隊員もあたりを調べていると、柱のそばに一枚の葉っぱが落ちていた。緑色で淵はギザギザになっている。

「隊長、これを見てください」

「植物の葉っぱのようだ。手がかりになるのは、この葉っぱと血痕だけか」

隊長は、葉っぱを受け取ると、人差し指と親指でつまんで、くるくると回しながら、観察をする。

スキンヘッドの隊員は、異星人に声をかける。

「私たちの仲間が食べられたときは、どんな状況だったのですか？」

「ええ、ちょうど今みたいな状況でしたよ」

「え？」

スキンヘッドの隊員が振り返ると、はえとり草のような形をした巨大な生き物の姿があった。大きさは十メートルを超えている。茎のような部分から生えている蔦をうねらせながら、一行をにらみつけていた。いや、巨大なはえとり草の怪物には目がないので「にらみつける」という表現は正確ではないかもしれない。だが、あきらかに、地球人や異星人に意識が向いていた。

「た、隊長！ 化け物が！」

「何だ、こいつら！ はえとり草の妖怪か！」

隊長は電子銃を取り出し、はえとり草の怪物に向かって照準を合わせる。スキンヘッドの隊員も電子銃を取り出し構える。

計二丁の電子銃で狙い撃つ。しかし、電子銃から放たれた光線は、はえとり草の怪物にあたって、跳ね返されてしまう。

蔦の一本が、スキンヘッドの隊員へ伸びる。グルグルと巻き付き、大きく開け放たれた口へ向かって放り込まれた。

「たいちようー！ たすけ——」

「ぐっ、この化け物め！ よくも！」

別の蔦が伸びて、隊長を捉えた。隊長は、激しくもがき脱出を試みるが、蔦は少しもゆるまない。

「無念だ……」

はえとり草の怪物は、二人目の地球人を捕食した。

再び、伸びた蔦は、異星人の一人を捉えた。異星人は、大きな口に向かって放り込まれる。

口の中に到達する直前、異星人は首を傾げながら不思議そうにつぶやいた。

「どうして、早く食べられようとしなんだ。我々、動物は、植物においしく食されること、もつとも偉大な名誉だというのに。あの地球人とかいう奴らは、おかしな生き物だ」